

## 知の総合としての医療安全 – 医療安全の新たな次元

酒井 亮二 日本医療安全学会 理事長

安全な世界への第1歩目は「何がリスクであるかを知ること」。質評価の問題。

第2歩目は「そのリスクの頻度を知ること」。量評価の問題。

「何がリスクで、その頻度は」を知ることによって、はじめてリスクの甚大さを計算できる(リスクアセスメント)。それによって、人はリスクに対して過大反応や過小反応をすることなく、混乱することもなく、冷静に正しく対処できるようになる。質評価と量評価を行うことが安全学の基本。

医療安全の世界は、死亡事故への対処という危機管理(クライシスマネージメント)だけを行っていれば十分でしょうか?

死に至らない甚大な医療事故も数々報告されている。また、作業現場の一般論として、重大な事故の下には多数の小さな事故が潜んでおり、その小さな事故を誘発する膨大なミスが潜んでいることが知られている。

医療現場が事故発生を予防するには、日ごろからの絶え間ない努力が医療安全活動には必要になっている。

「うまくいって当たり前」と期待されている医療で、医療安全の成果は患者にも医療者にも直接は知るよしもない。しかし、医療安全が崩壊すれば、医療は崩壊する。医療安全は医療機関における縁の下の力持ちと言い得る。

質的アプローチと量的アプローチ、そして絶え間ない日々の努力。それらをスマートに解決できる病院「スマートホスピタル」へ。その時、医療安全の新たな次元が展開する。